

コロナ禍の影響を最も大きく受けた領域の一つが、アート業界であったかもしれない。展示のための実空間は失われ、鑑賞者は作品の現物を目にする機会を奪われた。多くの展覧会が中止ないしは先行きの不透明な延期を余儀なくされた。

本展では、いみじくも「ありえたかもしれない物語」をテーマとして展示が企画されてきた。準備段階では、数ヶ月後に新型コロナウイルスのパンデミックが生起するなど誰一人として予想だにしていなかったはずである。これはどこか自己成就的予言のようでもある。

自己成就的予言というのは心理学の概念で、たとえ根拠のない予言——場合によっては単なる噂や、思いつきで口にしたこと——であっても、予言者本人も含めた人々がその言葉を受け入れて行動することによって、結果として予言通りの現実がつくられてしまうという現象のことである。

デルポイの神託も広義ではこの内に入るかもしれない。日本語ではコトダマと言われることもある。また、東アジア圏に顕著であるが、本名はその人物の本質的な部分を表す極めて重要なものであるから、むやみにその名を口にすべきではない（実名敬避俗、いわゆる忌み名）という習俗もあった。

ただちに本展の呼称がこのような未来を予言していたと短絡的に考えるものではないが、人間の心そして無意識の行動の裡に、形にされた言葉を現実にしてしまう力が作用するという本質的な構造を、

本展は図らずもコロナ禍を奇貨として、展示そのものの在り方として顕在化してみせたのではないかと思う。

展示のための実空間は失われたまま、本展は「ありえたかもしれない物語」のリアルをデジタルがなぞっていく、という形で開催され、展示は一度も実空間に示現されることはなく、ツアーをはじめすべてのプログラムがヴァーチャルで行われた。

作品をヴァーチャルに鑑賞することの是非はこれまでも多く語られてきた主題であるが、MITで教鞭をとる神経科学者である大御所パワン・シンハが監修し、Cuseum社が行ったデジタルアート鑑賞に関する研究[*1]は、いくつかの点に目を瞑れば興味深いものであった。『美術手帖』に掲載された当該研究についての記事を読まれた方も少なくないと思う[*2]。

研究では、作品の実物を鑑賞する場合と、デジタル（AR, VR, 2D写真）で鑑賞する場合との4モードでの脳の活動を比較している。手法としては脳の電気的な活動を時間的な精度良く追うのに適したEEG（脳波）が用いられた。被験者は美術のバックグラウンドを持たない9名。ランダムに提示される絵をモードごとに1分間鑑賞してもらい、その間EEGの測定が行われる。また、EEGだけでなく、記憶についても口頭で質問が行われ、1作品の鑑賞が終わるごとに、その作品を詳述するよう求められる（短期記憶の検証）。さらに記憶については1週間後にもセッションが

持たれ、口頭での回答を求められる（長期記憶の検証）。

EEGの測定結果からは、VR及びARモードで、特にガンマ帯において実物の鑑賞に匹敵する神経活動がみられた。ガンマ帯は31～120Hzの脳波であり、瞑想や高度な集中状態など高次精神活動に関連していると考えられている。40Hz付近ではアミロイドβの蓄積を抑え、アルツハイマー型認知症の発症を抑えることができる可能性が示されている[*3]。

短期記憶では、2D写真の鑑賞で成績が良くないものの、他のモード間で大きな差は見られなかった。一方、興味深いのは、長期記憶ではVRと2D写真の鑑賞で成績が悪かったものの、ARの鑑賞では実物よりもむしろ成績が良くなっていたという点であり、これは現物の鑑賞よりもオンラインの鑑賞の方に展望が開けていることを示唆するものである。

ただし本研究を依拠として論を展開していくには、以下の複数の注意点を踏まえておかなければならない。まずEEGで検出されるガンマ帯の脳波は、多くの実験において筋電的な活動や僅かな眼球運動によるアーティファクトによるものであることを示す研究が存在するという点である。ゆえに本研究で測定されたガンマ帯の脳波が実際の脳活動に起因するのかを識別するための慎重な検討は本来、必要不可欠なものである。次に、Cuseum社がAR（拡張現実）技術を利用したソリューションを美術館に提供し、ARを使って自宅で名画を楽しむ「Museum From Home」サービスを

公開するなどの営利事業を行っている企業だという点である。資金の提供元が同社であれば、自社の事業内容に関する支持的な研究結果が出た場合に、それが完全に中立的であるということを証明する際の説得力が減弱してしまうことは否めない。本研究の発表が「Museum From Home」のリリースに合わせたものであったというタイミングも考慮すべきかもしれない。さらにいえば、当該研究のサンプル数は9であり、結論を出すのにこの規模で十分かどうかという点も考慮に値するだろう。そして、いかに大御所のパワン・シンハが監修しているとはいえ、ピアレビューを通った論文ではない、という点は看過してはならないのではないか。結局アーティファクトであることが後に明らかになったMozart Effectのような社会現象が起きかねないという危惧が存在する。話題を先行させて大衆の意識の中に既成事実を構築してしまえば、実際に効果が科学的に否定されてもなお、大きな資金を動かし続ける素地としては十分、というサイエンスコミュニケーションの構造上の脆弱性は牢记の必要があろう。

【註】

* 1: "Neurological Perceptions of Art Through Augmented & Virtual Reality." Cuseum. 2020年7月7日7時59分閲覧

* 2: 「ARでのアート鑑賞は実物に匹敵する?」米スタートアップが研究結果を発表『オンライン美術手帖』2020.06.06. 2020年7月5日15時39分閲覧

* 3: Nature. 2016 Dec 7; 540(7632): 230-235